

地方だより

名古屋地方気象台



名古屋の地勢はまったく平面的で、立体感に乏しい。わずかに市の東部が一応の丘陵地帯をなし、多少の起伏がみられるにすぎない。つまり、気象台の在るあたりがそれである。海拔51mという市内でもかなり高い方、日和山と称する台地の上に、延面積 1068m²を有する鉄筋コンクリート3階建の明るく、スマートな庁舎が立っている。なんによらず新しいものはいいもので、一昨秋完成したばかりだから今のところまだ魅力はうせていない。さらに屋上には400kmの有効半径をもつ最新式レーダーのアンテナが、あたりをヘイゲイして光っている。

このレーダーは、高感度で、しかも強力なアンテナ制御系を持ち、等エコーや RHI 表示を持つ点など、ちょっといばれるが、なんといっても全方向に亘って重大な地形障害のほとんどない点有利である。はからずも名古屋周辺の平坦な地勢がこんなところに幸いている。

ところで、名古屋は古くから那古野、那古屋、名護屋などと呼ばれた。また古図に浪越と書いてナゴヤと読んだ例もあるらしいが、その語源については色々な説があってどうもはっきりしない。正式に名古屋と定められるようになったのは明治3年頃からのようである。

今日のような名古屋の市街ができたのは、慶長15年徳川氏が名古屋城を築いてからのことである。関ヶ原の役の後、徳川家康は、その子義直を清洲に封じたが、この地は低温で大水のはらんするおそれがあった。そこで城を名古屋の地に移すことになり、慶長15年工事に着手、大規模な城地を営んでここに移った。清洲の町民も大方ここに移り、名古屋の新市街が経営されるようになったのである。

その後は徳川親藩の城下町として発展し、ことに8代将軍吉宗と政策的に張り合った、尾張7代目の城主宗春の積極的政策は、従来、地方の一都市にすぎなかった名古屋を、京、江戸、大阪の三都にせまる商工業都市として発展させたのである。

以来幾星霜。どちらかといえば平安の夢をむさぼってきたといえよう。第2次大戦で丸裸になったとはいえ、それは名古屋に限らない。名古屋の町をひっくりかえるような大事は、やはり伊勢湾台風の時をもって最高とする。

あの恐ろしい惨事を2度とくりかえしたくないという県市民全体の願いは、必然的に台風に対して異常なまでに神経質になる。その当座しばらくは、台風発生ニュースとともに気象台に殺到する問い合わせの電話だけで職員がいかになやまされたことか。最近になって一応落ち着いたものの、他の気象官署にみられない気苦労がある。当然、情報や注、警報の発表についても細心の留意が要る。別にたいして災害を及ぼしたわけでもない台風についても、情報発表要領のちょっとした手違いや、進路予想の外れがあると、以前にみられなかったような思わぬ“はねっかえり”がある。

それだけ関心が深くなったともいえようか？ たしかに、防災対策は目にみえて進んできた。市を含めて愛知県下の防災に対する整備は、総合的におそく全国一といっても過言ではないかもしれない。

でも、現場の予報者にとっては、何となく目にみえない重荷を感じるのはどういうものだろう。伊勢湾台風時の予報が割によく当たったという一般の与論が、かえって気妙な負担となつてのしかかってくるのを否定できない。もし、今度、外したならば……その反動が……

ノローゼと笑うなかれ。あれ以来、名古屋地方気象台の奥底深く、十字架にも似た影が宿っている。といえはおおげさであろうか。もちろんその影の存在を忘れていた時の方が多かもしれない。しかしまだ、たしかに消えてはいない。

ともあれ、“尾張名古屋は城で持つ”という。戦災で焼失したその城も見事に復元した。いつの日か“尾張名古屋は気象台で持つ”といきたいもの。(佐藤藤平記)